



馬耳東風

今年も気ぜわしく一年が過ぎた。特段、大きな問題に遭遇した訳ではないが、身体的には老境を意識することが時々ある。最近、盛んに「人生100年時代」という言葉を耳にするが後、何年「QOL」を維持して生きられるであろうか。今年のノーベル医学生理学賞は癌の免疫療法の新しい扉を開いた本庶 佑氏が受賞することになった。医学生理学賞は身近な分野であり、他の分野に比較して特に感慨深く、素晴らしいことである。1987年 利根川 進氏、2012年 山中伸弥氏、2015年に大村智氏、2016年に大隈良典氏、そして本庶 佑氏が5人目の医学生理学賞の受賞者になった訳で、この四半世紀で日本における医科学研究のレベルが急速に向上したことの証であろう。本庶氏は「20世紀は感染症を克服した時代」であり、「21世紀は癌を制圧する時代」になるであろうと言っている。癌の恐怖から解放される時が一日でも早く訪れることを心から願わずにはいられない。

70年近く前、1949年11月、湯川秀樹がノーベル物理学賞を受賞した。当時、小学生であったが、校長先生が「湯川博士がノーベル賞を受賞した」と話したことを今でも覚えている。ノーベル賞がどのような賞か知らなかったが、賞は世界で一番人の役に立つ研究を行った人に与えられる賞であることを説明したように記憶している。当時、アフリカの僻地で黄熱病から人々を守るために命を懸けて活躍した野口英世の伝記を聞かされていたことも相まって、子供心に「自分も学者になろう」と思ったことを覚えている。敗戦から間もない荒廃した国土にあって、明るい話題が乏しい時代、日本人がノーベ

ル賞を受賞したことが、多くの子どもたちに夢と希望を抱かせたことは確かであろう。今でも「ノーベル賞」と言えば先ず湯川秀樹が頭に浮かぶ。

本稿を書きながら、就職して間もない半世紀も前に読んだ、「現代学問論」という毎日新聞の連載記事を思い出した。これは1970年1月から34回にわたり毎日新聞で連載されたもので、後に纏められて勁草書房から「現代学問論」として出版された。内容は物理学の大御所の湯川秀樹、坂田昌一、武谷三男の3氏による「学問の在り方」についての議論をまとめたものである。座右の書として時々開くことがあるが、驚く事は議論の内容が現在にも通じるものであるということである。湯川秀樹は其中で、「業績主義という考えが強くなると、次々に論文を出さないと落後する。論文の中身ではなく量で評価するという意味の業績主義では良い仕事は出来ない」「学問の世界に権力意識が出てくるとダメになる」と述べている。歴史に残るような大きな研究成果は長年にわたる地道な研究から生まれると、過去のノーベル賞受賞者が等しく述べていることである。経費対効果を指標にして、基礎研究よりも応用研究を重要視する傾向、さらに短期間で研究成果を求める圧力が益々強くなっている現状を思うと、近い将来、ノーベル賞級の研究成果は徐々に減少し、それが日本の科学力の低下を招き、それらが応用される現場力の低下に繋がるのではと心配になる。今、洋の東西を問わず、力を誇示し、唯我独尊に走る傾向が強くなる世の中、時代は変わっても研究者は「変動期」にこそ良い仕事ができると「現代学問論」で述べられている。来る年が「夢を語れる」年になってほしいものである。(青)